

令和 5 年 5 月 17 日現在

機関番号：33911

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K03102

研究課題名(和文) Clutter Image Rating 日本語版の得点と生活支障度の関連

研究課題名(英文) Clutter Image Rating Relationship between Japanese Edition Score and Impairment in Life

研究代表者

川乗 賀也 (Kawanori, Yoshiya)

同朋大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：20725113

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：Clutter Image Rating 日本語版の内的整合性による信頼性は、1回目 $r = .88$ 、2回目 $r = .93$ であった。1回目と2回目の平均得点の相関係数は $r = .67$ であり、再検査信頼性も受容可能な値であった。妥当性については、CIR日本語版の得点はSI-R日本語版の散らかり($r = .81$, $p < .01$)および捨てられない下位尺度の得点($r = .62$, $p < .01$)と強い相関を示した。ため込み行動の出現率は2.8%であり、先行研究とも概ね一致するものであった。さらに居宅介護支援事業所を対象として、ゴミ出し支援の現状を調査したところ独居世帯においてごみ出し支援が必要となるケースが多かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

DSM-5によると、ため込みの有病率は2%から6%と推定されている。本調査において、ため込み行動の出現率は2.8%であり、先行研究とも概ね一致するものであった。また、高齢者のセルフ・ネグレクトとゴミ屋敷は高い相関があるといわれていることから、居宅介護支援事業所を対象として、利用者に対するゴミ出し支援の実施状況、支援の難しさ、地域に求めることについて調査を行った。その結果、独居高齢女性においてごみ出し支援の実績が多いことが分かった。ごみ出しの収集時間は事業所のサービス提供時間外であることが多く課題が多い。

身体的な事情によりため込み行動につながる可能性があるため、早急に対策をする必要がある。

研究成果の概要(英文)：Compulsive hoarding was added to the new diagnostic criteria for mental illness in 2019, where the individual or a third party exhibits functional impairment due to symptoms such as the inability to discard items, even those without value, and the resulting cluttering of living spaces. Information on the prevalence of hoarding disorder in Japan is limited. This survey investigated the actual situation using the Clutter Image Rating (CIR) to measure the degree of hoarding behavior. The prevalence of hoarding behavior was 2.8%, which is generally consistent with previous research. As hoarding behavior is said to increase in older adults, we surveyed the current status of garbage disposal support for users of home care support services, and found that there are many cases where garbage disposal support is necessary for elderly individuals living alone.

研究分野：精神保健福祉

キーワード：ため込み症 ため込み行動 ごみ 高齢者 CIR 実態調査

1. 研究開始当初の背景

ためこみは様々な心理的、福祉的問題へと発展する。例えば、ためこみによって抑うつ（土屋垣内他、2015）、対人交流の回避（Coles et al., 2003）、家が過度に散らかることによる衛生上の問題、火災、あるいは崩落といった問題が生じる可能性がある（Frost et al., 2000）。居住空間が過度に散らかった状態は、巷では「ごみ屋敷」と呼ばれており、ためこみの問題は稀ではない。日本においても、ためこみは、セルフ・ネグレクト（生活において当然行うべき行為を行わず、安全や健康が脅かされる状態、高齢者虐待防止研究、2009）の1つとして重要な福祉的課題として位置づけられている（岸、2015）。また、ためこみは年代を問わずに生じる問題であるとされる（内閣府、2011）。

ためこみは通常、早期の介入が難しい（Frost & Gross, 1993）。わが国では、ためこみによって様々な問題（例：悪臭がする、道が塞がれている）が顕在化した後に、民生委員や地域住民の情報提供によって事後的に福祉的な支援が始められている。早期介入が難しいのは、ためこみによって福祉的な支援が必要になった状態像を定義することが難しく、客観的な評価基準もないため、行政で予算化することができないことが大きな理由である。そこで、ためこみの程度を査定する尺度の作成が求められていた。

アメリカなどの諸外国では、Clutter Image Rating (CIR)の得点が4点またはそれ以上の場合に、ためこみによって生活に支障が生じている可能性を疑うこととされている。しかし、国内外を含めて、CIRと生活支障度の関連を検討した例は皆無に等しく、CIRの4点というカットオフが妥当であるのかが不明である。

2. 研究の目的

本研究では、CIR日本語版の得点と生活支障度の関連を明らかにすることを目的とする。そのため、CIR日本語版の信頼性と妥当性を検討し、またCIR日本語版の得点と生活支障度の関連を検討する。

3. 研究の方法

(1) CIRの信頼性と妥当性の検討

①対面調査による検討

関西地方、九州地方および東北地方にある複数の福祉関係機関を通じて募集した27名を対象とした。原著者の同意を得た上で、CIRの教示部分を翻訳した。参加者には、CIRと別のため込み評価尺度であるSaving Inventory-Revised (SI-R)日本語版（土屋垣内他、2015）に回答してもらった。さらに、1週間の期間をあけて、CIR日本語版に再度回答してもらった。本研究は岩手県立大学研究倫理審査委員会の承認（承認番号：213）、参加者を募った各機関長の許可を得た上で実施した。

②Web調査による検討

参加者は、インターネット調査会社に登録している65歳以上のモニター100名であった。除外基準は、①認知症の自覚症状がある、②過去1ヶ月の間に引っ越しなど、自宅の散らかりが大きく変化する出来事がある、であった。参加者には、CIR日本語版、(SI-R)日本語版（土屋垣内他、2015）、自記式認知症チェックリスト（宮前他、2016）に回答してもらった。本研究の実施にあたり、岩手県立大学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：356）。調査は2022年5月に実施した。

(2) CIRを用いた散らかりの程度の評価

CIRを用いて、居住空間の散らかりの程度を評価する試みとして、高齢者世帯におけるCIR得点が4点以上の世帯割合、ゴミ出し支援が行われている高齢者世帯におけるCIR得点の実態を調査した。

①高齢者世帯におけるCIR得点が4点以上の世帯割合

岩手県A市B地区の65歳以上の高齢者が居住する2400世帯のうち、2独居世帯、65歳以上の夫婦のみで暮らしている夫婦世帯、夫婦以外の65歳以上のみで住んでいる世帯、およびそれ以外の一般世帯がそれぞれ42、46、10、および102世帯ずつ含まれるように世帯を抽出した。調査協力を辞退された場合は、追加で世帯を抽出した。対象者には口頭で十分な説明を行い、同意を得た上で調査を行った。抽出された世帯を訪問し、承諾が得られた空間について、調査員がCIR日本語版に記入した。本調査の実施主体は地域包括支援センターであった。本調査を実施するにあたってはセンターの運営主体である川久保病院から承認を得た（承認番号 2019-3）。

②ゴミ出し支援が行われている高齢者世帯におけるCIR得点の実態

岩手県C市D地区36の居宅介護支援事業所のケアマネージャーを対象として、利用者に対するゴミ出し支援の実施の有無とケース概要に関する調査を実施した。2018年4月から2018年12月の期間で、D地区でサービスを提供している利用者にゴミ出しを支援している方がいたか否かを回答してもらい、いた場合はケースに関する情報の提供を依頼した。ゴミ出しを支援している

ケースについては、性別、年齢、世帯状況等の基礎情報に加えて、CIR 日本語版への回答を求めた。

(3) CIR 日本語版の得点と生活支障度の関連の検討

参加者は高齢者 300 名であった。包含基準は、65 歳以上であること、日本に居住していることであった。除外基準は、精神科や心療内科に通院していること、服薬をしていること、認知症の自覚症状があることであった。参加者には、自記式認知症チェックリスト（宮前他、2016）、CIR 日本語版（土屋垣内他、2015）、Hoarding Rating Scale-Self-Report (Tsuchiyagaito et al., 2017) に回答してもらった。本研究は岩手県立大学研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号 356）。

4. 研究成果

(1) CIR の信頼性と妥当性について

①対面調査による検討

27 名のうち、男性は 18 名であった。参加者の平均年齢は 49.9 歳であった。CIR 日本語版の平均得点については、平均が 2.2、標準偏差が 1.33 であった。支援が必要となる可能性を示唆する 4 点以上を示したのは 3 名のみであった。内的整合性による信頼性（1 回目 $\alpha = .88$ 、2 回目 $\alpha = .93$ ）、再検査信頼性（1 回目と 2 回目の平均得点の相関係数 $r = .67$ ）にずれも受容可能なレベルであった。妥当性については、SI-R 日本語版に欠損値が多い 1 名を除く 26 名を分析対象とした。CIR 日本語版の得点は SI-R 日本語版の散らかり ($r = .81$, $p < .01$) および捨てられない下位尺度の得点 ($r = .62$, $p < .01$) と強い相関を示した。他方で、CIR 日本語版の得点は入手下位尺度の得点と弱い相関を示した ($r = .35$, $p < .01$)。

②Web 調査による検討

除外基準に該当した 7 名を除く 93 名を分析対象とした。参加者の平均年齢で 71.2 歳であった。参加者の属性としては、誰かと同居している参加者は 74 名 (79.6%)、男性が 48 名 (51.6%)、既婚者は 70 名 (75.3%)、子どもがいる参加者は 66 名 (71.0%) であった。内的整合性による信頼性は、 $\alpha = .97$ であった。表 1 に CIR と SI-R の 3 つの下位尺度の平均点と標準偏差、および変数間の相関係数を示す。CIR 日本語版の得点と SI-R 日本語版の散らかり ($r = .46$, $p < .01$) との間には有意な中程度の正の相関を示した一方で、捨てられない下位尺度 ($r = .22$, $p < .05$) および入手下位尺度との間では有意な弱い正の相関を示した ($r = .19$, ns)。

表 1 CIR と SI-R の 3 つの下位尺度の平均点と標準偏差、および変数間の相関係数

	M(SD)	1.	2.	3.
1. CIR	1.5 (1.24)			
2. SI-R 散らかり	8.9 (7.15)	.46**		
3. SI-R 捨てられない	7.0 (4.27)	.22*	.71**	
4. SI-R 入手	4.9 (3.82)	.19	.53**	.63**

* $p < .05$, ** $p < .01$

注：CIR=Clutter Image Rating; SI-R= Saving Inventory-Revised.

(2) CIR を用いた散らかりの程度の評価

①高齢者世帯における CIR 得点が 4 点以上の世帯割合

調査協力が得られた 199 世帯のうち、台所、居間、および寝室のいずれか 1 つ以上に対して評定が得られた世帯は 72 世帯であった。台所は 61 世帯、居間は 70 世帯、寝室は 45 世帯から回答が得られた。127 世帯 (63.8%) は、CIR への記入に同意しなかった。大多数の世帯において、ため込み行動に問題がみられない評定 1 であった。72 世帯のうち、ため込み行動が高くなるといわれる CIR の平均点が 4 以上の世帯は独居世帯（評定 4）と一般世帯各 1 世帯（評定 5）の合計 2 世帯 (2.8%) で、評定が 6 以上の世帯は見られなかった。

②ゴミ出し支援が行われている高齢者世帯における CIR 得点の実態

ゴミ出しを支援している利用者は 19 名であった。内訳は女性 14 名 (73.7%) である。世帯類型としては、独居世帯が 13 名 (68.4%) であった。住居種別は、持ち家が 15 名 (78.9%) であった。認定区分は、要支援 2 が 4 名 (21.1%)、要介護 1 が 7 名 (36.8%)、要介護 2 が 7 名 (36.8%)、要介護 3 が 1 名 (5.3%) であった。認知症がある利用者は 5 名 (26.3%) であった。ゴミ出し支援の利用状況としては、ゴミを運搬する支援は 19 名全員、ゴミの分別は 7 名 (36.8%)、および袋詰め支援は 8 名 (42.1%) が利用していた。この 19 ケースにおける CIR 日本語版で測定された自宅の環境レベルの分布を表 2 に示す。アメリカではこの尺度で 4 以上の場合にリスク

があると判断して詳細な現状確認を行っている。該当するのは居間で3例（15.8%）、台所と寝室でそれぞれ1例（5.3%）のみであった。19ケースのうち、16のケースでは3以下であり、ゴミ出し支援によって部屋が片付いていると言える。

表2 ゴミ出し支援が行われている19のケースのCIR得点の分布

CIR得点	1	2	3	4	5
居間	8	5	1	3	0
台所	6	8	2	1	0
寝室	5	8	4	0	1

注：CIR=Clutter Image Rating。3か所のうちの一部の環境レベルが不明なケースがあるため、合計が19になっていない。

(3) CIR日本語版の得点と生活支障度の関連の検討

除外基準に該当する36名を除く264名を分析対象とした。平均年齢は70.62歳(SD = 4.98)、男性は132名、既婚者は213名、一人暮らしは47名であった。CIRの平均点が4点以上の参加者は6名（うち男性2名）、そうでない参加者は258名であった（うち男性130名）。CIRの平均点が4点以上の参加者は、そうでない参加者と比較して、Hoarding Rating Scale-Self-Reportの情動的苦痛 ($t(262) = 3.61, p < .01$)、および機能障害 ($t(262) = 3.02, p < .01$) の得点が高かった（図1、図2）。したがって、ため込みに伴う情動的苦痛や機能障害は、CIR得点が4点以上の人で顕著に高かった。

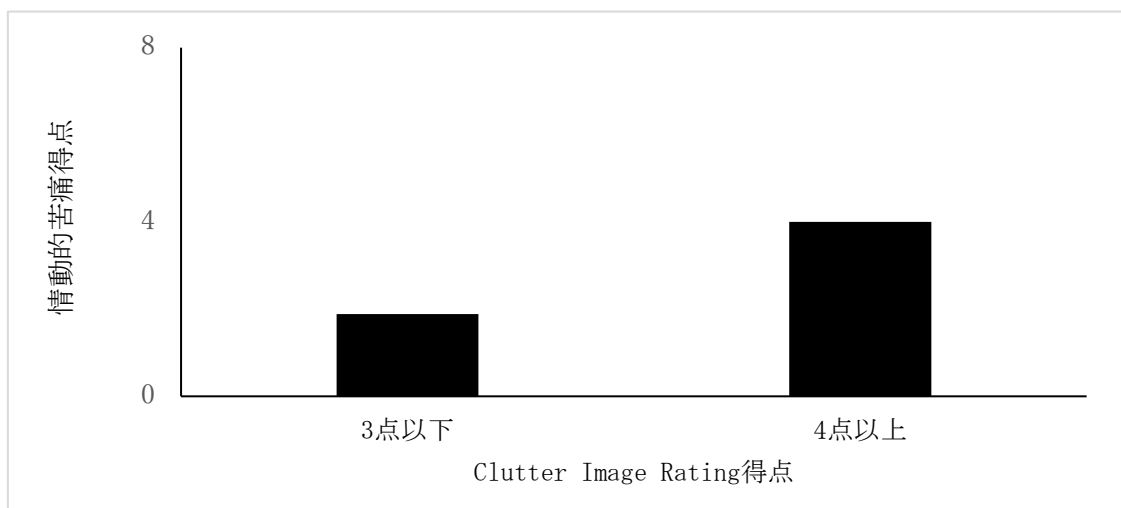


図1 Clutter Image Rating 得点の高低による情動的苦痛得点の差異

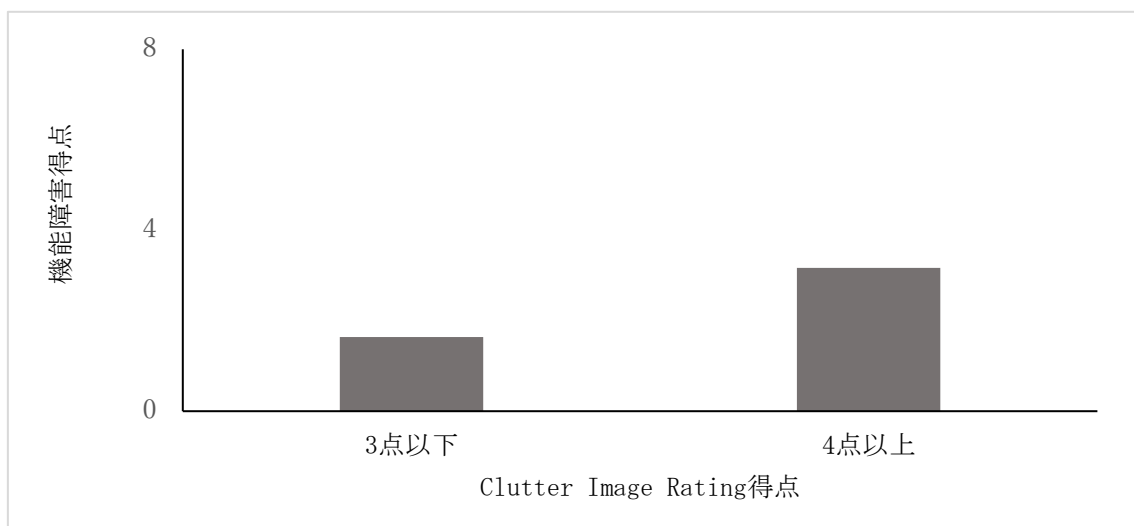


図2 Clutter Image Rating 得点の高低による機能障害得点の差異

〈引用文献〉

- ① American Psychiatric Association. Diagnostic and statistical manual of mental disorders (5th ed.). Washington, DC: American Psychiatric Association, 2013.
- ② Coles ME, Frost RO, Heimberg RG, Steketee G. Hoarding behaviors in a large college sample. Behaviour research and therapy, 41(2), 2003. 179-194
- ③ Frost RO., & Gross RC. The hoarding of possessions. Behaviour Research and Therapy, 31, 1993. 367-381
- ④ Frost RO, Steketee G, Tolin DF, Renaud, S. Development and validation of the Clutter Image Rating. Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment, 30, 2008. 193-203
- ⑤ 岸恵美子 セルフ・ネグレクトの背景・実態と課題 実践成年後見, 58, 2015. 62-71
- ⑥ 宮前 史子, 宇良 千秋, 佐久間 尚子, 新川 祐利, 稲垣 宏樹, 伊集院 睦雄, 岡村 毅, 杉山 美香, 栗田 圭一 自記式認知症チェックリストの開発 (2): 併存的妥当性と弁別的妥当性の検討 日本老年医学会雑誌, 53(4), 2016. 354-362
- ⑦ 土屋垣内 晶, 黒宮 健一, 五十嵐 透子, 堀内 聡, 安藤 孟梓, 鄧 科, 吉良 晴子, 津田 彰, 坂野 雄二 ためこみ傾向を有する日本の青年の臨床的特徴 不安症研究, 6(2), 2015. 72-85
- ⑧ 津村智恵子 セルフ・ネグレクト防止活動に求める法的根拠と制度的支援 高齢者虐待防止研究 第5巻1号, 2009. 61-65
- ⑨ Aki Tsuchiyagaito, Satoshi Horiuchi, Toko Igarashi, et al. Factor structure, reliability, and validity of the Japanese version of the Hoarding Rating Scale-Self-Report (HRS-SR-J) Neuropsychiatric Disease and Treatment No.13, 2017. 1235-1243

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 菅野道生、堀内聡、川乗賀也他	4. 巻 24
2. 論文標題 岩手県A市B地区の高齢者世帯におけるゴミ出し支援のニーズに関する調査	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 岩手県立大学社会福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 145-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野道生、堀内聡、川乗賀也、大友有香 照井典子 中居倫子	4. 巻 25
2. 論文標題 ごみ出し支援を必要とする高齢者世帯の実態と支援上の課題：居宅介護支援事業所のケアマネジャーを対象とした調査から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 岩手県立大学社会福祉学部紀要	6. 最初と最後の頁 123-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川乗賀也、堀内聡、菅野道生、土屋垣内晶、大友有香、照井典子、中居倫子	4. 巻 108
2. 論文標題 高齢者世帯におけるため込み行動の出現率に関する調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 同朋論叢	6. 最初と最後の頁 139-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 堀内聡・菅野道生・川乗賀也・大友有香・照井典子・中居倫子
2. 発表標題 東北都市部におけるゴミ出し支援に関するニーズ調査：岩手県A市B地区を対象として
3. 学会等名 第22回日本健康支援学会年次学術大会・第8回日本介護予防・健康づくり学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 堀内聡、川乗賀也、土屋垣内晶、菅野道生
2. 発表標題 Clutter Image Rating (CIR) 日本語版の信頼性と妥当性に関する予備的検討
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第45回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀内聡、川乗賀也、菅野道生
2. 発表標題 ため込みに関連する認知に関する検討
3. 学会等名 日本行動科学学会第36回ウィンターカンファレンス
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	菅野 道生 (Kanno Michio) (00582008)	岩手県立大学・社会福祉学部・准教授 (21201)	
研究分担者	堀内 聡 (Horiuchi Satoshi) (20725999)	比治山大学・現代文化学部・准教授 (35410)	
研究分担者	前田 佳宏 (Maeda Yoshihiro) (60907921)	東日本国際大学・健康福祉学部・准教授 (31604)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------